

川



ナイル河の土産屋。4階の開いた窓に向かって投げ込むようなものである。気に入らないと、客も上手に船に投げ返す。

アジアの地図を広げると中国からぶら下がるようにしてインドシナ半島がある。半島の東側にベトナム、西側にタイ。そしてこれら二つの国に挟まれるようにしてラオスとカンボジアがある。

チベット高原に源流を發するメコン川はラオスの首都ビエンチャンを通過した後は、タイ・ラオスの国境沿いに、インドシナ半島を縦断するように流れベトナムから南シナ海に出る。

メコン川は揚子江、黄河に次ぐアジア第三の大河である。

福井工業高等専門学校の非常勤講師をしていたころ、クラスの生徒の一人にラオスからの留学生がいた。彼は私に「ラオスに来て下さい、案内しますから」と熱心に勧めてくれた。

仕事の合間を見つけ行こうと決めた時期があいにく彼が帰国できない時と重なってしまったが、それでも向こうでは彼の父親（ラオスの高級官僚）と友人（医学生）に面倒を見てもらえることになり、バンコック経由でビエンチャンに入った。二〇〇一年の夏のことである。

ピエンチャンは一日もいれば全て見て回れるほどの小さな静かな首都である。ラネキサホテル（千匹の象）ホテル）が予約してあった。窓を開けると道を挟んでメコン川が流れていた。一九九五年に対岸のタイに橋が架かり容易に行けるようになったと聞いた。

滞在中何もすることがなくなると川の近くまで歩いて、大きな木の下のテーブルと椅子だけのレストランで中華をつまみにラオビールを飲んでみた。

川幅は一キロ近くあったのでないだろうか、雨期のメコン川はゴーと低い音を立ててその川幅いっぱい濁流を流していた。流れは速かった。目線とあまり変わらない高さ幅一キロの濁流があった。圧倒的な量の水が、途切れることなく流れていた。それは四千キロ以上を流れる巨大な川の途中の姿であった。

エジプトのナイル川も一度だけ見たことがある。古代エジプトの遺跡を観光船で巡る8日間の旅を職場の同僚としたときである。

カイロから南に下がること六七〇キロのルクソールから船に乗る。このあたりまで下がるナイル川の川幅は数百メートル位でゆっくりと流れている。船が移動するホテルなどで、その中で食事をして寝た。部屋の窓の高さがナイル川の流れよりも少しだけ高かった。

朝、出航するときぶるぶると船全体が震え、それが部屋にいて分かった。ああ今から出るみたいだと、同室の友人と話す。同じ形の同じ大きさの観光船が何艘も川の上下を行き来するのを甲板の長いすに座って眺める。川の両岸にはそこに住む人たちの生活があった。

船が減速してやがて停止した。エナス水門である。ナイル川の水量を調整するための水門であると説明を聞いたが何のことかよく分からなかった。ともかくここは船が一艘ずつしか通過できないので、待つしかない。結局出発まで十一時間も停船していたが、その間土産物の民族衣装を積んだ二、三人乗りの小さなボートが我々の観光船を取り囲み、下から大声で盛んに「買わないか、安い」と叫ぶ。ビニール袋に包んだ衣装類を甲板に投げ上げると、それが見事に届く。船の客は品物を袋から出して品定めをする。下のボートにいる人が投げ上げた品物の値段をこれまた大声で叫ぶ。交渉が成立すればビニール袋に金を入れて下に落とす。

ロシア人の団体客は投げ上げられたアラブの民族衣装を着て記念写真を取り、返していたとガイドの青年は言っていた。

(二〇〇六年十一月二十三日)